

## 編集後記

赤木完爾先生は二〇一九年三月末日をもって、慶應義塾大学定年制の規定に従い、法学部を退かれる。それを記念してここに先生のご退職記念号が無事に刊行されることになった。赤木先生の長きにわたる塾法学部への多大の貢献に対する深甚なる感謝を込めつつ、法学研究会を代表して、謹んで本記念号を捧げる次第である。

私事になるが、赤木先生との思い出話を少しばかりご紹介させていただきたい。先生は私の亡兄と同一年であるが、法学部に赴任されたのは私の翌年であった。ほぼ同期に近く、お互いIT関連の知識が多少あることもあって、入試やネット環境整備などの学内業務をご一緒させていただくことが多かった。その点では歳が少し離れているものの非常に親しくさせていただき、多くのことを学ばせていただいたのだが、最も印象に残っているのは次のエピソードである。出会ってすぐの頃の事だと記憶しているが、自分が一番関心を持っている研究テーマは「インテリジェンス」の問題であると赤木先生が自己紹介的に語られたのである。思想研究の末席に連なるものとして、私はこの言葉を「知

性」と早合点し、「あれ？ 赤木先生はゴリゴリの国際政治リアリストだと思っていたけど、誤解だったかな」と訝しんだことを思い出す。しかし少し話を続けていくうちにこの「インテリジェンス」が「諜報」を意味していることが判明してきたのである。『007シリーズ』や『ミッション・インポッシブル』などのスパイ物を連想すれば、一気に荒唐無稽化して捉えられがちな「諜報」であるが、考えてみれば国家の安全保障にかかわる情報収集は単なる「情報」の集積で済む問題ではない。収集した情報を評価し、有益なものや無益なものを選別し、時には書かれていないことまで、まさに「行間を読む」ことが求められるのである。

してみると私の最初の早合点も決して的外れなものではなかったであろう。類まれなる「知性」の持ち主でなければ、そのような情報の選別と評価などできようもないからである。実際、赤木先生は極めて知的好奇心の旺盛な方であり、義塾の全教員の中でおそらく一番、私を質問攻めにされた先生であった。質問の大半は科学哲学や方法論に関するものであったが、私も改めて調べ直してみなければ、そう簡単に答えることのできないような、ディープな質問ばかりであった。

退職後の三年間は日吉での科目のみを担当されるおつもりだと伺っている。他学部向けの政治学と政治学科の初学者向けの演習科目だそうだ。その意味ではまだまだ赤木先生の質問攻めに悩まされそうである。もともと、それは嬉しい悩みではあるが。

末筆ながら赤木完爾先生の末長いご健康とさらなるご研究の発展を心よりお祈り申し上げたい。

二〇一八年十二月

法学研究会代表・法学部教授 萩原能久